アメイジング・グレイス
～魂の夜明け

◇1◇

希望こそが私たちに困難を乗り越えさせる！

作家　神渡　良平

「アメイジング・グレイス」という、私たちが大きな愛に包まれて生きていることを感じさせてくれる歌があります。

コンサートでこの歌を聴いている聴衆の様子を見ると、涙を流す方がいたり、恋人と抱き合って「一緒に頑張ろう」と約束し合ったり、いろいろな思い出や共感が湧き、生きる力をいただいていることが伝わってきます。

私は最初この歌を聴いて心を揺さぶられたとき、「この歌にはいったいどんな背景があるのだろう」と思いました。調べてみるとこの歌は、イギリス国教会の司祭ジョン・ニュートンが書いたものでした。しかも彼は、司祭になる以前は奴隷船の船長をしていたことも分かりました。

そこで私はイギリスに渡り、ロンドンやリヴァプールやオルニーの教会などを取材し、その後、黒人の側からも見てみようと西アフリカを訪ねました。

セネガルの首都ダカールの沖合3キロにあるゴレ島に、奴隷収容所が残っていました。そこには「no return gate(二度とアフリカに帰ってこれない門)」がありました。その門をくぐって船に積み込まれた黒人たちは、そのままアメリカに奴隷として連れていかれます。ですから船に乗せられまいと必死に抵抗しました。

その通路の壁は、掴むところのない壁にもかかわらず、必死にしがみついたのでしょう。壁の表面が血のりでツルツルになっていました。

海に飛び込んで逃れようとした人もいました。しかし、はめられている鉄の手錠の重さで沈みます。しかも海にはサメがウヨウヨいて、その犠牲になった人も多かったそうです。

そもそもこうした黒人の奴隷が生まれたのは、白人によって起こされた部族間の争いが原因でした。イギリスやフランスから運ばれてくる毛織物や綿織物を欲しがる部族の人たちに、白人の奴隷商人たちは戦いに負けた部族を奴隷として差し出すよう提案したのです。

――――＊――――

ジョン・ニュートンは若い時、イギリスとアフリカ、アメリカを行き来しながら黒人奴隷貿易を行っていました。

そんな1748年のある日のこと、イギリスに帰る途中、彼の乗った船が嵐に遭遇しました。死ぬか生きるかの絶体絶命の状況に追い込まれ、必死になって祈りました。

「神よ、どうか助けてください。もう一度生きる機会を与えてくださったならば、私は人々の魂の生活に寄与する人生を生きます」と。

すると、その願いが届いたのか、4週間漂流したのち、船は奇跡的に北アイルランドに漂着し、一命を取り留めることができたのです。

「もう金輪際、奴隷貿易



には携わらない」と誓った彼は、子どもの頃からの念願だった聖職者になる道を進み始めます。そして大変な努力を積み重ね、イギリス国教会の聖職者になりました。

最初に赴任したのは、オルニーという小さな村の教会でした。彼がそこで司祭をしながら書き上げたのが「アメイジング・グレイス」だったのです。

「かつて道を踏み外し、目が見えなかった私のような恥ずべき人間でさえも救われた。ああ、アメイジング・グレイス（驚くほどの神の恵み）！　神の恵みはなんと偉大であることだろう」

それはどんな人間でも立ち直ることができるという喜びの詩でした。

この歌は多くの人々の共感を得、イギリス全土へと広がり、さらに当時イギリスの植民地であったアメリカにも、移民と共に渡っていきました。今から２５０年ほど前の話です。

そしてこの歌は、アフリカから強制的に連れてこられた黒人たちにも共感され、彼らの間にも広がっていきました。

すべての権利をはく奪され、炎天下での綿花畑で重労働を課せられていた奴隷たち―。その過酷な運命の黒人たちもこの歌に共感し、いろいろな節をつけながら歌うようになりました。

「神は私を見捨ててはいらっしゃらない。自暴自棄にならず、着実に道を歩んでいけば、いつかきっと私にも自由な日がやってくる」、と黒人たちは自分たちを励ましたのです。

―＊―

この歌が、さらに白人の間にまで広がっていくようになったのは、ベトナム戦争終結ののちでした。

歴史上初めてアメリカが対外戦争で敗れた。しかもアジアの小さな国に―。そのショックはアメリカ国民に深刻な精神的荒廃をもたらしました。

「軍もマスコミも信じられない」。そんな不信感が国中を覆い、国として危機的な状況がやってきたのです。

その時、１人の歌手が静かに「アメイジング・グレイス」を歌い始めました。ジュディ・コリンズという女性歌手でした。しかもアカペラで。

するとこの歌はアメリカ国民一人ひとりの心に染み入り、「もう一度、本来の自分を取り戻そう」と人々に信じる心を取り戻させていき、その感動は燎原の火のように全土へと広がっていったのでした。

―＊―

もしも貧困と差別によって虐げられていたアメリカの黒人たちが自暴自棄になり、いま中東で見らるような自爆テロのように暴力で自分の意見を通そうとしていたならば、アメリカは根底から覆され、体をなしていなかったかもしれません。

そして四分五裂して混乱し、きっと世界にまで悪影響を及ぼしていたことでしょう。

しかしこの歌が「私は神の大きな見守りの中にあり、決して見捨てられてはいない」と人々の心を癒したことにより、その後もアメリカは落ち着いた国としてその使命を果たすことができたのでした。

（養心の会・日向が主催した日向市での講演会より）

【かみわたり・りょうへい】38歳の時、脳梗塞で倒れ一時は半身不随となったが、必死のリハビリで再起。この闘病生活中に、人生はたった一回しかないこと、またどんな人にもなすべき使命があってこの地上に送られていることを痛感。闘病中に起草した『安岡正篤の世界』（同文舘出版）がベストセラーになる。

近作に『志が人と組織を育てる　グルメ回転寿司「銚子丸」が吉田松陰から学んだ理念』『アメイジング・グレイス　魂の夜明け』（以上、廣済堂出版）、『苦しみとの向き合い方　言志四録の人間学』など多数。

アメイジング・グレイス
～魂の夜明け

◇2◇

作家 神渡 良平
Kamiwatari Ryohei

「アメイジング・グレイス」について取材しながら、終戦直後、同じような情況があったことを思い出しました。

１９４５年、第2次世界大戦が終わったとき、ドイツで大変なことが行われていたことが発覚しました。ナチスがユダヤ人狩りをし、１２００万人ものユダヤ人を強制収容所に拉致し、しかも８００万人をガス室で虐殺していたのです。

広島の原爆で亡くなった方が20万人、長崎で犠牲になった方が14万人、この前の東北大震災で亡くなった方が1万９０００人だったことを考えると、この８００万人という数字の大きさが分かると思います。

この事実が発覚したとき、「人間はこれほどまでにおぞましいことができるのか」と多くの人が悲嘆に暮れ、人間そのものに猜疑の目が向けられました。

ショックと共に、人間という存在自体に対する不信感が世界中に広がっていきました。

終戦から2年後の１９４７年、オーストラリア人の精神科医ヴィクトール・フランクルが『夜と霧』を出版しました。彼は、ダッハウなど４つの収容所を２年７カ月も見事に生き延びた人でした。

その本は、収容所でナチスが行ったひどいことについて告発した本だろうと思いきや、そうではなく、「地獄のような状況の中でも人間性を失わない人たちがいた！」という驚くべき内容でした。

自分の弱さに打ち勝ってこそ真の人間だ



収容所では、強制労働でクタクタに疲れ、誰かが一片のパンを食べながら死ぬと、周りの囚人たちが死者の口をこじ開け、食べ残されたパンを奪い取って食べるという地獄絵図のようなことが起こっていました。

「しかしそんな中に、人間の尊厳を保ちながら過ごす人間がいた」と多くの例をあげて書いたのです。

収容所で、多くの囚人たちがフランクのところに相談に来ました。

「俺はもう生きていたくない。電流が流れている鉄条網に触れて死にたい」と。

その囚人にフランクルは言うのです。「あなたにも待っている人がいるでしょう」と。「息子がイギリスにいる」と答える彼にフランクルは言いました。

「頑張って生き延びれば、息子さんはあなたを抱きしめてどんなに喜ぶでしょう。それを希望に頑張りましょう」と。

囚人たちの心を希望に向けると、「よ～し、頑張るぞ」という気持ちになれたというのです。

これらのことを通してフランクルは、希望を持つことが人間にとってとても大切なことを証明しました。まだやらなければならないことがあると、人間は頑張って生き抜きます。そんな事例を示して、フランクルは『それでも人生にイエスと言う』と言い、同名の本を書き、世界中の人々に希望を与えました。

「人々への愛と希望を持つことで、人間は困難を乗り越え、崇高な社会を築き上げることができる」と。

このメッセージに感動した人たちが、「もう一度人間を信じて、人間らしい社会を築こう」と、焼け野原に理想郷を描き、新しい世界を夢見て再建の一歩を踏み出していきました。

この『夜と霧』と同じように、「アメイジング・グレイス」も人々の心に希望の火を灯しました。

ですから私は「どうしてもこの歌の意味を日本の方々にも伝えたい」と思い、6年の歳月をかけて『アメイジング・グレイス　魂の夜明け』を書き上げました。

（養心の会・日向（ひむか）が主催した日向市での講演会より）

アメイジング・グレイス
～魂の夜明け

◇3◇

作家 神渡 良平
Kamiwatari Ryohei

苦しみが立ちはだかるとき 人はどのように向き合えばいいのか？

昨年、私が書いた『苦しみとの向き合い方』という本の中で、大阪の辻光文先生のことを書きました。

辻先生は、犯罪を犯した青少年たちを集め、親子関係を構築し直し、安定した精神状態にして、再び社会に復帰させるプログラムを実践しています。

先生のところに1人の女の子が預けられました。以前、女番長をやっていたという経験を持つ女の子です。

彼女が来てから、施設の他の子どもたちも巻き込まれ、悪さをするようになりました。

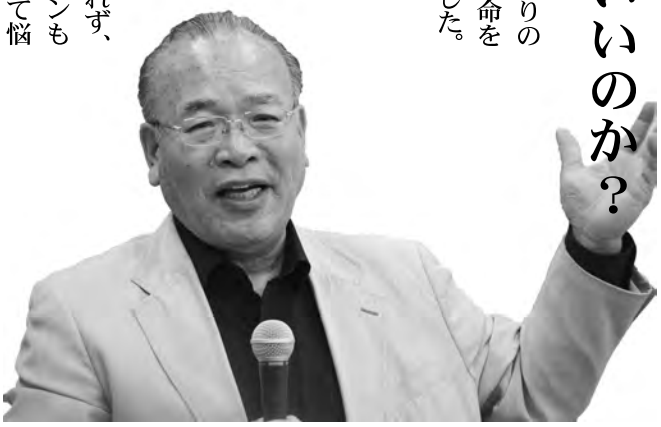
辻先生はそれを見て「あの子さえいなければ、みんな安定していたのに」と、ついつい思ってしまいました。ところがある時、その子に腫瘍が見つかり、緊急手術が行われました。

辻先生は思わず必死に祈りました。「あの子がいい子にならなくていい。命さえ助かってくれればそれでいい」と。

手術後の療養生活を通して、あれほど荒んでいた女の子が落ち着いていくのを見て、辻先生ははっと気が付きます。

「御仏の光は一人ひとり平等に注がれている。私自身が心の中で『トラブルメーカー』とか『問題児』などのレッテルを貼っていたのではないか」と。

それから先生は、一人ひとりの子どもたちに手を合わせて「命を拝む」ようになっていかれました。



この本を書き上げたとき、一人のご婦人にメールを送りました。彼女は2年前、2番目のお子さんを授かったのですが、その子は障がいを抱えていました。

その子は目を合わせてくれず、なかなかコミュニケーションも取れない子で、彼女は母として悩み苦しみました。

「この子は一生誰かのお世話にならなければ生きていけないだろう。こんな子を育てる意味があるのだろうか？」と。

ご主人が仕事から帰ると、真っ暗な家の中で上の子どもが一人で泣き、彼女も布団を被って泣いていました。家庭は崩壊する寸前でした。

そんな彼女が私のことを思い出し、メールをくれたのです。「わが子を愛することができません。どうしたらいいでしょうか？」と。

それからメールのやり取りが始まり、何とか気を持ち直しました。

そんな彼女でしたので、私はきっと何かのヒントになると思い、「新しい本ができたので読んでみていただけませんか？」とメールと本を送ったのでした。

1週間後、彼女からメールの返信がありました。

「辻先生が書かれた『生きているだけではいけませんか？』の詩を読みながら泣きました。荒れた子どもたちにひたすら手を合わせて祈ってらっしゃる辻先生。その姿に、自分の子どもを愛することができずに育児放棄していた自分が申し訳なく思いました」と。

それから彼女は大きく変わり、辻先生と同じように「命を拝む」ようになっていきました。

苦しみが目の前に立ちはだかるとき、人は「何でこんなことが起こるのだろう。私が一体どんな悪いことをしたというの？」と抗（あらが）うものです。

しかしその苦しみには多くの場合、背後に隠れたメッセージがあるように思います。そのメッセージをつかみ取ったとき、その苦しみは使命を終わり自ら消滅していくのだと思います。

（養心の会・日向が主催した日向市での講演会より）

アメイジング・グレイス
～魂の夜明け

◇4◇

作家 **神渡 良平**
Kamiwatari Ryohei

私は『マザー・テレサへの旅路』を書いたとき、ニューヨーク州立大学病院のロビーに掲げられている詩を紹介しました。その詩の作者は「自分は運がなかった。やることなすことが全然かみ合わず、つらい人生だった」と、すべてを投げ出しかけていました。

でも最後に気が付かれました。「そうじゃない。つらかったあのこともこのことも、私に大切なことに気付いてほしいという天の願いだった」と。それが次の詩です。

「大きなことを成し遂げるために力を与えてほしいと神に求めたのに謙虚を学ぶようにと弱さを授かった／より偉大なことができるようにと健康を求めたのによりよきことができるようにと病弱をあたえられた／幸せになろうとして富を求めたのに賢明であるようにと貧困を授かった／世の人の称賛を得ようとして成功を求めたのに得意にならないようにと失敗を授かった／求めた物は一つとして与えられなかったが願いはすべて聞き届けられた／私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福されていたのだ」

この方は、「私たちは大きな存在に見守られて生かされている」と気付かれました。

この人の苦しみも「サムシング・グレート」には分かっていて、「つらいだろうけど投げ出すなよ。心を強くし、頑張って乗り越えてくれ」と願っていらっしゃるのです。

そのメッセージに気付いたとき、私たちは「何が起ころうとも真正面から受けて立とう。私の存在のすべてを懸けてそれを乗り越えていこう」という気持ちになれるのだと思います。

歴史の大きな流れもたった一人の固い信念から始まった



1779年、「アメージンググレイス」を作詞したジョン・ニュートン司祭がロンドンの大きな教会の聖職者として招かれました。

その時、内なる声が彼に語りかけました。

「あなたは長い間、奴隷貿易に携わり、黒人たちの悲哀をつぶさに見てきました。世界の奴隷貿易の4割を行っているこのイギリスで、奴隷貿易禁止の法律を作りなさい」と。

彼はその声に従い、国会議員を説得して回りますが、みんな彼をバカにし、笑います。

「イギリスの産業もアメリカの綿花栽培も黒人たちの労働力なしにはなり立たない。そんなきれい事が通用するものか！」と。

しかしその説得活動が6年を過ぎた頃、ウィルバーフォース議員がその意見に賛同し、議員の賛同者を一人ひとり増やしていきました。

それから28年が過ぎた1807年、ウィルバーフォースは81歳のニュートン司祭に「奴隷貿易廃止法」が国会を通過したことを報告します。

ニュートン司祭は翌年、天国へと召されていきましたが、さらにそれから50年以上過ぎた1863年、リンカーン大統領が黒人奴隷解放を宣言していくのでした。

この奴隷制廃止の歴史的な大きな流れをつくったのが、ジョン・ニュートンという1人の人物だったわけです。

「苦しくてもつらくても、頑張ってそれを乗り越えていけば必ず光が見えてくる」ということを、ニュートン司祭自身も実践していかれたのだと思います。

皆さまも「アメイジンググレイス」に聴き入り、すべての人が大きな命に支えられ、励まされながら導かれているということを再確認されたら、こんなにうれしいことはありません。

（養心の会・日向が主催した日向市での講演会より～終わり）